



静岡茶の積み出しでにぎわう
清水波止場

にはその工場がなかった。このため、海野は静岡製茶再製所を設立し、さらに、定期船が入港するよう、輸出先の米国に航路を持っていた日本郵船と10年にわたる交渉の末、明治39年、直輸出の契約を成立させたのだった。

文化・他産業にも 大きな影響

直輸出が始まった明治39年の清水港の輸出量は2353トン。4年後には8803トンに伸び、主要輸出港の神戸や横浜を制し、日本一のお茶の輸出港となった。さらに勢いは止まらず、ピーク時の大正7年には1万5419トンを記録、日本の茶輸出量の66%を静岡茶が担っていた。

その後日本茶は、米国市場において巨大な茶園で生産されるインドやスリランカのお茶に押され、第一次世界大戦を機に、次第に衰退していった。現在、清水港からお茶が輸出されることは極めて少ない。しかし、直輸出が静岡茶を発展させ、それによりさまざまな産業に影響をもたらしたことは大きい。

静岡から清水まで、大八車によるお茶の輸送は、明治41年に軽便鉄道に変わり、現在、静岡鉄道として市民の重要な足と



日本郵船の米国直航船
「神奈川丸」
(日本郵船歴史博物館所蔵)



平成18年5月に開催された
「発見！体験！お茶100年祭」
式典

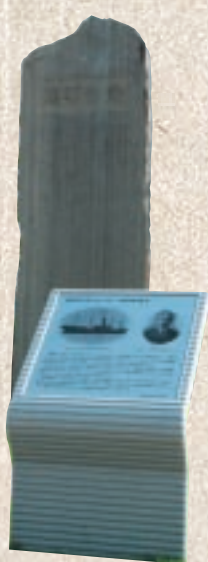
なっている。

海外で人気を博した輸出用の茶箱ラベル「蘭字」は、直輸出を機に静岡で作られるようになった。フェルケル博物館の西野和豊さんは「静岡県は版画文化が盛んですが、それは蘭字の制作で多くの版画家が静岡に移り住んだのも影響しています」と語る。横浜港で取引をしていた「外商」は輸出の柱が清水港になってから、再製工場のある静岡・安西に支店を置くようになった。以降、静岡市は一大お茶町を形成するとともに、国際的な商業都市の性格を強めていった。

健康ブームで輸出量拡大

現在、国内消費を主流とするお茶だが、平成17年には輸出量が1000トンを超えるなど明るい兆しが見えてきた。「海外でお茶会を開いたり、茶娘の格好で各種イベントを盛り上げたり、茶販売だけでなく、文化というくくりでアピールしてきました。それが実を結んだのと、緑茶ブームと健康志向の追い風を受け、少しずつ輸出量が上がってきました」と、日本茶輸出組合の前理事長・谷本勇さんは目を細める。

時代は変わっても、茶関係者の挑戦は続いているようだ。



平成18年5月に日本平から清水マリンパークに移設された海野孝三郎の顕彰碑

【参考資料】●清水港開港100年史(静岡県、平成11年発行)

●世界に静岡茶売った男 清水港から初の直輸出 海野孝三郎伝(森竹敬浩著、平成5年発行)

●茶道楽(静岡県茶文化振興協会、平成13年発行)

時の
かけら

静岡茶の発展

起点は清水港の直輸出だった

清水港から、お茶が外国へ直接輸出（直輸出）されて

今年で100年を迎えた。

この間、静岡茶は躍進的に成長し、今日の地位を築き上げた。

発展のルーツをたどると、そこには静岡茶にロマンをかけた人々の足跡が残されていた。

茶業拡大、 港の復興を夢見て

全国一の茶どころ・静岡にはお茶にまつわる史跡が数多く残されている。清水マリナーパークに建つ海野孝三郎の石碑もその一つ。海野の功績といえば茶の再製所（仕上げ加工施設）設立や製茶販路の拡大など多々あるが、最も重要な功績は清水港の直輸出を実現させたことだろう。

清水港でお茶の直輸出が開始されたのは明治39（1906）年。「日本郵船の米国への直航船『神奈川丸』が初めて入港した日、花火が打ち上がり、人々は埠頭へ集まり、帽子や手を振り、出迎えたそうです」と、県農業水産部お茶室の岡あつしさんは話す。それほど、清水港の直輸出は茶業関係者をはじめ海運業に携わる人々、清水港の復興を願う人々の悲願だったのだ。

日本で茶の輸出が始まったのは安政6（1859）年。長い鎖国が解かれ、海外への扉が開かれた希望にあふれた時代だ。この年から静岡茶の輸



茶の直輸出に尽力した
海野孝三郎



明治・大正時代に輸出茶を
静岡から清水港へ運ぶ風景

出が始まった。

当時、清水港は開港場（貿易港）の指定を受けていなかったため、開港場である横浜港経由で米国へと輸出されていた。静岡茶の輸出量は年々増えていく。しかし、横浜港では「外商」と呼ばれる貿易商社が支配していたため、静岡茶業は発展するどころか足踏み状態。

一方、明治22年の東海道線の開通により、茶輸送が鉄道へ移行すると、清水港は一気に閑古鳥が鳴くありさまに。「これではいけない」と立ち上がったのは地元の関係者だった。「清水港を開港場にして復興させたい」。熱い思いは市民運動を起こし、明治32年、ついに清水港は開港場の指定を受け、外国貿易港となった。

「ようやく輸出ができる」。安堵の前に立ちはだかったのは、再製工場と輸送船の問題だった。当時の輸出茶は湿気を防ぐために再製工場て火を通し、乾燥させたものを米国へ送っていたが、清水港



海外で人気を博した輸出用の
茶箱ラベル「蘭字」